

天声人語

大正期の関東大震災、さらに昭和初期の室戸台風。大災害は昭和初期の室戸台風。大災害の経験をふまえ、物理学者の寺田寅彦は多くの戒めを後の世に残した。ある文章に「文明が進めば進むほど天然の暴威による災害がその劇烈の度を増す」との訴えがある▼國中に電線やパイプ、交通網が張り巡らされたありさまは「高等動物の神經や血管と同様である」。その1力所が故障すれば影響は全体に波及するのだと述べたものだが、現代にも通じる。台風15号の傷痕を目にして思う▼暴風に見舞われてから3日目となる昨日も、千葉県の広い地域で電気が止まつたままだった。あまたの送電線が倒木で切断され、復旧に手間取る。被害のひどい君津市の市役所では、大勢の人が携帯電話の充電をしていた▼スマホを手にした30代の女性は「電池が切れる」と、情報が何も取れなくて」と話していた。家がオール電化になつてているという60代の女性は、「何もできない。トイレの水すら、バケツを使わないと流せないんです」▼残暑というには暑すぎる日々に、クーラーや冷蔵庫なしの暮らしは、文字どおり命にかかる。固定電話やコンロなど、電気なしでは使えなくなつたものも増えている。もしものときの備えは、どこまでできるのだろう▼寺田の考え方だとして伝わる警句に、「天災は忘れたころにやってくる」がある。それにしても昨今の日本は、一つの災害を忘れる間もなく別の災害が起きるようになって思えてならない。

2019・9・12